

「語源の話」

平成十五年十月十七日 上野村役場

群馬県立女子大学 北川和秀

語源を考える上で必要なこと

漢字表記にはとらわれない。
 できるだけ古い時代の語形・語義にさかのぼって考える。
 歴史的仮名遣い（旧かな）で考える。
 奈良時代以前の語は、上代特殊仮名遣いにも留意する。
 ローマ字で考えてみる。
 同種・同類の例を探してみる。

一、導入一（地名起源説話）

日本武尊の曰はく、「蝦夷の凶しき首、威に其の辜に伏ひぬ。唯信濃国・越国のみ、頗未だ化に従はず」とのたまふ。則ち甲斐より北、武蔵・上野を転歴りて、西碓日坂に遶ります。時に日本武尊、毎に弟、橋媛を顧びたまふ情有します。故、碓日嶺に登りて、東南を望りて三たび歎きて曰はく、「吾孀はや」とのたまふ。故因りて山の東の諸国を号けて、吾孀国と曰ふ。日本書紀景行四〇年は歳

悉荒ぶる蝦夷等を言向け、亦、山河の荒ぶる神等を平和して、還り上り幸す時、足柄の坂本に到り、御糧食す処に、其の坂の神白き鹿に化りて来立ちぬ。尔して、即ち其の咋ひ遣したまへる蒜の片端以ちて待ち打ちたまへば、其の目に中りて乃ち打ち殺したまひき。故、其の坂に登り立ち、三たび歎かして、「あづまはや」と詔云らしき。故、其の国を号けて阿豆麻と謂ふ。

古事記中・景行

二、導入二（さけのさかな）

「さかな」の漢字表記

ア、魚
 イ、肴

「な」は本来おかず（副食物）のこと。魚、肉、野菜など、すべて「な」。「さかな」は「さか（酒）+ な（副食物）」。「魚は、美称の「ま（真）」を付けて「まな」ともいう。「まないた」

魚は「うを」といった。魚を「さかな」と言うようになるのは江戸時代から。ナマの魚を「うお」、調理した魚を「さかな」といって区別する地方もある。

三、露出形と被覆形

【単独だと工段、熟語になるとア段】

つめ（爪） つまさき（爪先） つまづく（爪突く）
 つまはじき（爪弾き） つまびき（爪弾き） つまびき（爪弾き）
 つまむ（掴む） つまむ（掴む） つまようじ（爪楊枝）

さけ（酒） さかぐら（酒蔵） さかだる（酒樽）
 さかつき（酒盃） さかば（酒場） さかな（肴）
 さかや（酒屋） さかや（酒屋） さかもり（酒盛り）

あめ（雨） あまおと（雨音） あまがえる（雨蛙）
 あまがさ（雨傘） あまがさ（雨傘） あまぐ（雨具）
 あまごい（雨乞い） あまごい（雨乞い） あまだれ（雨垂れ）
 あまど（雨戸） あまど（雨戸） あまもり（雨漏り）

かね（金） かなあみ（金網） かながた（金型）
 かなぐ（金具） かなぐ（金具） かなしばり（金縛り）
 かなづち（金槌） かなづち（金槌） かなぼう（金棒）
 かなもの（金物） かなもの（金物） かなもの（金物）

め(目)

まつげ(目つ毛)

まなこ(目な子)

まなざし(目な差し)

まなじり(目な尻)

まばたき(目叩き)

まばゆい(目映い)

まぶた(目蓋)

まへ(前/ま(目) + へ(方))

*他に、「いね(稲)」「ふね(船)」などあり。

【単独だとイ段、熟語になると才段】

き(木)

こかげ(木陰)

こがらし(木枯)

こぐち(木口)

こずえ(木末)

こだち(木立)

こだま(木霊)

こつば(木端)

このは(木の葉)

こもれび(木漏れ日)

ひ(火)

ほづつ(火筒)

ほてる(火照る)

ほなか(火中)

ほのほ(炎/火の穂)

*「穂」は「秀」。稲穂、波の穂、槍の穂先、伊香保、穂高

四、動詞と名詞

【動詞の連用形からできた名詞】

・編む 網 歌う 謡 かぶく 歌舞伎 暮らす 暮らし 恋ふ 恋

さぶらふ さぶらひ(侍) 散る 塵 掘る 堀 光る 光

・「あおぐ」と「扇」 あぶぐ(扇ぐ) あぶぎ(扇)

【動詞の未然形からできた名詞】

・つく(築) つか(塚) なふ(絢) なは(縄)

【名詞からできた動詞】

・料理 料る 羽織 羽織る

五、形容詞からできた名詞

・あまし(甘) あめ(飴)、あかし(赤し) あけ(朱)、
たかし(高) たけ(岳)・たけ(竹)

六、撥音化して次の音が濁音になった例

・すみすり(墨磨り) → スズリ → すずり(硯)
・ふみて(文手) → フンデ → ふで(筆)
・のみと(飲み門) → ノンド → のど(喉)

七、色の名前

古代の基本色は「あか」「くろ」「しろ」「あを」の四色。
・赤・黒は明暗。「あか」は「明し」、「くろ」は「暗し」
・白・青は顕漠か。「しろ」は「いちしろし」(著)、「あを」は未詳。あるいは「藍(あゐ)」と同語源か。

植物に由来する色名が多い。

・あかね(赤根)、あさぎ(浅葱)、あゐ(藍)、くれなる(呉の藍)、
むらさき(紫/群咲き)、やまぶき(山吹)

「みどり」は、本来は「萌え出たばかりの若葉」の意。

八、漢語起源の言葉

漢語からできた和語

・銭(セン) ぜに、馬(マ) むま、梅(メイ) むめ、
鬼(オン) 隠(オン) おに、縁(エン) えにし)

訓と間違えそうな音

・菊(キク)、駅(エキ)

九、女房言葉

【語の下部を省略し、上に「お」を付ける】

- ・かき餅 → お+かき(もち) → おかき
- ・(副食物の)数物 → お+かず(もの) → おかず
- ・強飯 → お+こは(いひ) → おこは
- ・田楽 → お+でん(がく) → おでん
- ・冷水 → お+ひや(みづ) → おひや

【語の下部を省略し、下に「もじ」を付ける】

- ・髪(かみ) → かもじ
- ・杓子(しゃくし) → しゃもじ
- ・そなた → そもじ
- ・目通り、目見え → めもじ
- ・湯帷子、湯巻き → ゆもじ

十、地名表記(近江・上野について)

- ・「近江」はどうして「おうみ」と訓むのか? 「おうみ」の意味は?
- ・「うみ」という語は、海水の海だけでなく、淡水のうみ(湖)も含んだ。
- ・淡水の「うみ」のみを指す語には、「みづうみ」または「あはうみ(淡海)」がある。海水の「うみ」は「しほうみ(塩海)」。
- ・現在の滋賀県は、日本最大の湖である琵琶湖があるので、淡海国といった。よみは「あはうみ」「あふみ」。
- ・現在の静岡県西部は浜名湖があるので、「遠淡海(とほつあふみ)」の国といった。今の滋賀県は「近淡海(ちかつあふみ)」の国。遠近は都から見えて。
- ・大宝元年(七〇一)頃、国名は漢字二字と定められた。「近淡海」「遠淡海」はともに漢字三字になってしまったので、「淡海」を「江」と置き換え、「近江」「遠江」と改めた。しかし、よみは従来通り、「ちかつあふみ」「とほつあふみ」のまま。
- ・両国を区別するのに、遠江を「とほつあふみ」と言えば、近江の方は、わざわざ「ちかつあふみ」と言う必要はない。そこで、近江は単に「あふみ」と言うようになった。

- ・「上野」はどうして「こうづけ」と訓むのか? 「こうづけ」の意味は?
- ・現在の群馬県・栃木県のあたりは、古くは「毛野国(けのくに)」といった。
- ・この国を二つに分け、「上毛野(かみつけの)」(「下毛野(しもつけの)」)と呼んだ。都に近い方が「上」、遠い方が「下」。
- ・この両国名は、漢字二文字の折、中間の「毛」の字を切り捨てて、「上野」「下野」とした。よみは従来通り「かみつけの」「しもつけの」のまま。
- ・やがて、時代が下るにつれて、「かみつけの」「かみつけ」「かづつけ」「かうづけ」「こうづけ」と変化していった。

十一、単語家族の例

- いき(息)、いきる(生きる)、いこふ(憩ふ)、なげき(嘆き)。長+息(おと(弟)・乙(おとつと)弟。おとひと(おとす(落)・おとる(劣)・おとろへ(衰))
- *「乙女」は「をとめ」なので、これとは別。「をとこ(男)」「をと」と同じく、「年若い」の意。

- いかめし(厳)、いかづち(雷)、いかる(怒)、いかほ(地名)
- みづ(水)、みなかみ(水な上)、みなと(水な門・港)、みなもと(水な元・源)、いづみ(出づ水・泉)
- やす(瘦)、やさし(優・易)
- *世の中を憂しとやさしと思へども飛び立ちかねつ鳥にしあらねば(山上憶良)

十二、特定分野の語が一般的な用法に転じた例

- 歌舞伎…おほこ、正念場、長丁場、二枚目、花道、檜舞台
- 相撲…勇み足、痛み分け、肩透かし、黒星、仕切り直し
- 囲碁…一目置く、傍目八目、定石、捨て石、駄目、駄目押し、布石
- 将棋…王手、終盤、高飛車、成金